

個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と 教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究

H26 - エイズ - 一般 - 001

総括研究報告書

研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部 教授）

研究要旨

わが国の HIV サーベイランス開始以来一貫してその対策の重要性が高く、対策の喫緊の課題である Men who have Sex with Men (MSM) を対象に 5 つの研究課題を実施した。本研究ではインターネットを用いたモニタリング調査や予防介入に加えて、MSM を取り巻く教育・検査・臨床現場における予防と支援を通じて、MSM のおかれている社会的環境の変容の一助とすることを目的とした。

そこで 5 つの研究課題を実施した。研究 1：インターネットによる MSM の HIV 感染リスクに関する行動疫学研究（日高庸晴） 研究 2：認知行動理論（CBT）による HIV 予防介入研究（古谷野淳子） 研究 3：学校教育における性的指向・性同一性に配慮した HIV 予防教育に関する研究（佐々木掌子） 研究 4：HIV 抗体検査陽性判明者の HIV 分子疫学的解析とリスク行動の関連に関する研究（川畑拓也） 研究 5：療養中 HIV 陽性者（MSM）における治療と予防行動のモニタリングに関する研究（白阪琢磨）である。

研究 1：MSM の感染予防行動の動向把握とその関連要因を明らかにすると共にその経年的モニタリングを行うことを目的に、PC、スマートフォン、タブレット、携帯電話の 4 端末から回答可能なシステムを構築してインターネットによる行動疫学調査を実施した。有効回答数は計 20,821 名であった。

研究 2：認知行動理論の手法を用いた個別認知行動面接による HIV 予防介入手法の普及のために、コミュニティ活動家や保健師からの協力を得て、MSM 対象にこれまでこの介入手法が実施されていない地域や保健所での実施可能性について検討した。

研究 3：これまでに学校で実施されてきた HIV 予防教育は男女間の性感染予防に重視されてきた。しかし流行の主流は MSM であり、学校で実施可能な内容で教室に一人は存在する MSM へ予防メッセージをいかに届けるかという視点から、授業案の作成を試みた。

研究 4：HIV 陽性と判明した者の感染している HIV 遺伝子を解析し、遺伝的に近い関係にある HIV に感染している者同士をリスクが共通していると仮定してグルーピングし、グループ同士のリスク因子を比較・解析することを目的とした。これまでに 4 例の HIV 陽性者の回答と HIV を得た。

研究 5：HIV 陽性 MSM の臨床現場における縦断調査の実施のため 1 年目は質問紙の開発を行い、調査開始に着手した。

研究分担者（分担掲載順）：

古谷野 淳子（新潟大学医歯学総合病院 特任助教）

佐々木 掌子（立教女学院短期大学現代コミュニケーション学科 専任講師）

川畑 拓也（大阪府立公衆衛生研究所感染症部 ウイルス課 主任研究員）

白阪 琢磨（独立行政法人国立病院大阪医療センター HIV 先端医療開発センター エイズ先端医療研究部長）

A. 研究目的

研究 1：Men who have Sex with Men (MSM) における HIV 感染リスク行動や予防行動の実態とその関連要因を行動疫学研究によって明らかにすることを目的とする。また、1999 年以来研究代表者が実施している当該集団対象のインターネット調査シリーズの一環であり、経年的モニタリングとしても位置付けられる。

研究 2：MSM 対象の HIV 予防介入プログラムとして開発した個別認知行動面接の普及を目指し、MSM 対象に未実施地域での実施、保健所での活用、コミュニティ活動での活用を目的とした。

研究 3: これまでのわが国の学校における HIV 予防教育では、男女間の性感染予防を目的にしたものが多く、MSM の存在はあまり視野に入れられなかった。本研究では、男女間の性感染症予防教育で重視されてきた「自己と他者の尊重」をセクシュアルマイノリティにまで広げ、学校での HIV 予防教育を行い、その教育効果を評価することを目的とした。本年度は授業実施の際に使用する共通の授業案を作成することを目的とした。

研究 4: HIV 抗体検査受検者を対象にした質問紙による行動疫学調査や、インターネット調査等で MSM の HIV や性感染症の感染リスク行動はある程度明らかになってきている。その一方で MSM のなかでも特にどういったリスク行動をとる人たちの間で HIV 感染が拡大しているかは、行動疫学調査と検査結果が関連づけて検討されてこなかったため、真に明らかになっているとは言えない。本研究では HIV 抗体検査受検者に行動疫学調査（質問紙）を行い、HIV 検査の結果が陽性であった場合、その HIV の遺伝子の塩基配列の類似性から近縁な HIV に感染しているもの同士の行動疫学調査結果を解析し、その行動様式の関連性より HIV 感染者のリスク行動において真に高いリスク行動を明確化することを目的とした。

研究 5: MSM 対象の行動疫学調査ではコンドーム常時使用率の低さや薬物使用率の高さが示され、メンタルヘルスの不調が指摘されている。しかしながら療養中の HIV 陽性 MSM を対象にそのフォローアップを行った研究はわが国では見当たらない。HIV 陽性者のメンタルヘルスと性行動の関連、その経年的変化と関連要因を明らかにすることにより、HIV 陽性者の療養や予防的行動の支援に資するために、実態調査を実施した。

B. 研究方法

研究 1: 無記名自記式の質問票をインターネット上の調査サイトに掲示、MSM を対象に横断調査を実施した。回答システムはインターネット環境の多様化を鑑み、PC、スマートフォン、タブレット、携帯電話の 4 端末から回答可能なように構築した（研究実施期間：平成 26（2014）年 8 月 28 日～12 月 15 日）。

研究 2: これまでに大阪と横浜で実施して効果検証を行った個別認知行動面接（以下、本法）を東京・広島・新潟の 3 ヶ所で実施した。参加者取り込み基準は、「18 歳以上の男性」「過去に HIV 感染状況不明の男性との間に Unprotected Anal Intercourse (UAI) が 1 回以上あった」「現時点で HIV 陰性または感染状

況が不明である」の 3 条件すべてを満たす者とした。インターネットで参加募集を実施、1 回約 40 分の心理士等による面接とその前後の質問紙調査を実施した。

大阪府の協力を得て保健所での検査相談場面での MSM への予防介入の実施状況や困難点等についてヒアリングを行い、保健所で実施可能な簡易版モデル（1 回約 20 分）を検討し考案した。府下保健所の保健師 9 名を対象に簡易版の研修を実施、事前事後に質問紙で研修効果を測定、現場での試験的実践を依頼した。その後 8 名にフォローアップ研修を実施し、本法の保健所での活用可能性について意見を募った。

全国の MSM 向けコミュニティセンターおよび HIV や LGBT 関連の支援団体、計 8 団体に本法への関心の有無を照会し、希望のあった 4 団体のコミュニティ活動家計 9 名に、本法の体験機会を提供した。3 団体 5 名に対しては個別面接形式のオリジナル版を、1 団体 4 名にはオリジナル版を修正応用したグループ版を心理士が実施した。体験後質問紙とインタビューにより感想や評価を求め、コミュニティ活動への取り入れの可能性について検討を依頼した。

研究 3: 研究 2 年目に実施予定の効果測定のための授業案を作成するために、奈良県高等学校人権教育研究会所属の人権担当高校教員（12 名～51 名）と中学の教員 2 名、教材の偏りを排しより均霑化に資するため、神奈川県公立高校教員 2 名からも協力を得て、7 回の教材作成のための検討会を持った。教材作成にあたっては研究分担者が作成した授業案に対し、教員が検討を加え、授業として不適切な点はないか、授業のやりやすさや難しさの点など多角的に意見を出してもらった形式を取った。また、奈良における第 3 回目と 5 回目の検討会では、教員に対する多様な性の理解を深める目的で、分担者による講演を行い、学校教育の中で、特に授業として多様な性を取り扱っていくべき根拠について話した。

研究 4: 1. 受検者アンケート調査：大阪府の保健所・特設検査場における HIV 検査受検者への行動疫学調査（質問紙調査）の実施に向けて研究 1 年目は調整をした。また、研究計画を 1 年ほど前倒して MSM 向けに HIV/STI 検査を実施している診療所医師の協力を得て、調査を開始した。質問紙調査は、同意が得られたものから回答を得た。医師により受検者と質問紙に共通の ID が付与され、検査結果と質問紙は共通の ID により関連付けた。

2. 陽性者の HIV の分子疫学解析：HIV 検査で陽性が確定した場合の HIV の分子疫学解析を行った。本年度は例数が少ないことから、地域

で2009年から2014年に陽性となったものから検出された HIV を対象とし、遺伝学的に近縁な HIV の検出状況を評価した。

研究 5: 研究デザインは縦断的研究とし、無記名自記式質問紙を用いて定期的に追跡するモニタリング調査（連結可能匿名化）を研究 1~3 年目を通じて行う。取り込み基準は、1) 大阪医療センター感染症内科に HIV 感染症を主たる疾患名として新たに受診した者。2) 男性であること。3) 日本語の質問紙に回答可能であること 4) 初診から 3 か月以内、初回回答から後 6~9 ヶ月以内、2 回目回答から後 12~15 ヶ月以内の計 3 回とし、3 回ともに回答することに同意を得ることが出来る者。また、分析対象者は上記対象患者のうち、男性間の性的接触を経験した者に限る。質問紙の開発の開発にあたっては、国内外の先行研究や MSM の HIV 陽性者および対人援助職や研究者からのヒアリングをもとに開発した。

（倫理面への配慮）

倫理面に配慮が必要な研究は、研究者所属施設の研究倫理委員会による研究計画の審査・承認を得たうえで、研究を実施した。

C. 研究結果

研究 1: 総回答数は 21,888 件であった。除外基準に基づき分析対象者を決定したところ、有効回答数 20,821 件（総回答数に対する有効回収率は 95%）であった。

1. 基本属性

研究参加者の平均年齢は 32.2 歳（11~71 歳、SD=9.4）、年代は 20~30 代が大半を占めた。全国 47 都道府県すべての居住者が含まれており、居住地は都市部が多く在住者が多く、東京都 24.7%、関東地方（東京都を除く）21.6%、大阪府 9.8%と続いた。

最終学歴は大学卒以上が 48.1%であった。性的指向は男性同性愛者が 79.8%、両性愛者が 14.5%、判らない 2.4%、決めたくない 2.6%であった。

2. 学齢期（小・中・高）における出来事

「これまで（小・中・高）の学校生活で、同性愛についてどのような情報を得たか」全体の 61.4%が一切習っていない、5.7%が異常なものとして、20.0%が否定的情報、肯定的情報は 7.0%であった。「男女間のエイズ予防教育」は全体の 49.6%は男女間のエイズ予防教育を受けた経験があり、10 代や 20 代は 70%を上回っていた。「男性同性間のエイズ予防に関すること」は全体の 14.1%が男性同性間のエイズ予防教育を受けた経験があり、若年層にその割合

が高かった。

3. HIV・性感染症に関する知識

「現在、日本のゲイ男性に HIV/AIDS が流行していると思う」といった流行状況について、全体の 7 割が認識しているが、10 代では半数程度にとどまった。「過去 6 ヶ月間にゲイ同士で HIV について話題にしたこと」においても同様の傾向であった。特筆すべきは 10 代の 32.1%、20 代の 21.8%は「HIV に感染していたら、献血をした時に教えてもらえらると思う」と認識しており、MSM を対象にした献血ドナー教育の必要性が示唆された。

4. MSM 対象コミュニティセンター訪問率

MSM を対象にした HIV 予防施策の一環あるいは NPO の活動拠点として設置しているコミュニティセンターの曝露は、コミュニティセンターが設置されている都道府県およびその近隣地域の在住者において高い傾向がみられた。

5. 性行動およびコンドーム使用状況

過去 6 ヶ月間におけるセックス経験率は 89.6%であった。セックスの相手は、「友達やセクフレ」が最も多く 59.4%であった。コンドーム常時使用率は 31.2%であり、居住地域によって違いがみられた。また、年齢階級別では 10 代が最も低率であった。

6. HIV 抗体検査受検率

HIV 抗体検査生涯受検率は 54.7%であり、10 代が最も低率であった。過去 1 年間の受検率は 32.6%、生涯経験率同様に 10 代が最も低率であった。居住地別にみると、大阪府（39.3%）、愛知県（38.7%）、東京都（37.2）といった都市部在住者で高い傾向がみられた。HIV 抗体検査受検場所は、「保健所や保健センター」が最も多く、次いで「病院・診療所・クリニック」であり、都市部に受検しやすい環境があることが示唆された。

7. 過去 6 ヶ月間のゲイ向け施設・SNS 利用状況

「ゲイバー」が全体の 45.3%と最も多く、「サウナ系ハッテン場」26.4%、「マンション系ハッテン場」17.3%「野外系ハッテン場」14.2%と続いた。性的接触を主たる目的としたこれらの施設の利用率は、10 代~20 代よりも 30 代~40 代の方が高く、地方在住者よりも都市部在住者の方が高い傾向がみられた。SNS・アプリを通じて出会った男性とセックスした経験率は 10 代~20 代においてより高い傾向にあったが 30 代、40 代、50 代においても半数以上に経験があった。

研究 2: 東京・広島・新潟の 3 地域 17 名に対して実施した。面接と前後アンケート完了は 16 名であり登録数と比較した終了率は 51.6%だった。参加者は 20 代~50 代で参加動機は

「HIV 予防に関心」、「CBT によるプログラムに関心」、「自分のセックスについて考えたい」の順だった。事後アンケートで不快感を指摘した参加者はなくインパクトを感じた点として「自分の(UAI 時の)セルフトークの傾向がわかったこと」9 名(56.2%)が最も多く、次いで「自分のセックスについて話し合えたこと」が 6 名(37.5%)であった。9 割前後の参加者が面接の中で自分の納得のいく「セィファーに転換するためのセルフトーク」や「コンドーム使用を提案する言葉や方法」を見い出せていたことが示された。また、実施後は実施前より参加者の UAI 回避やコンドーム使用に対する自己効力感が高まり、セィファーセックス実践は自分の工夫次第だとする主体的な考え方が強まった。

保健師対象の初回研修により、本法実施に必要なスキルに関して参加者の自己効力感有意に上昇していた。フォローアップ研修後のアンケートでは、本法を現場で機会があれば実践できると思うかとの問いに対し、5 名(62.5%)が「まあまあ自信がある」、3 名(37.5%)が「どちらとも言えない」と回答した。また、全員が今後の実践への意欲を示した。本法の保健所での普及可能性については全員が意義を認めたが、課題として現場の時間的限界との折り合い、本法のスキル向上および伝達のための継続研修の必要性などが挙げられた。

本法を体験したコミュニティ活動家からは肯定的な感想と不満な点の指摘があった。肯定的な感想としては、認知に焦点づけた新しい手法への関心や分かりやすさ、楽しさなどであった。不満点は、オリジナル版では踏み込みの物足りなさやタイプ分けされることの不快感、グループ版にはオリエンテーションやフリートーク感の不足などであった。本法を自地域の活動に取り入れる可能性については、グループイベントへの援用に可能性ありとする意見が優勢であったが、実際の活用にあたってイメージされる内容は地域により異なっていた。

研究 3: 授業案作成のための検討会は各回 2~51 名の公立学校教師と全 7 回、討議を繰り返した。2 回分の授業案が作成され、1 回目で多様なセクシュアリティの自己理解と他者理解を、2 回目で多様なセクシュアリティの尊重と肯定を学び、その否定が HIV 感染などの不健康行動と結びつくことを学ぶカリキュラムとした。

研究 4: 協力医療機関 9 ヶ所において HIV/STI 検査を受検する MSM に質問紙調査を実施し、これまでに 150 名程度から検査結果判明前に質問紙を回収した。その内 4 名が HIV 検査で陽性が確定した。現在までにこれら 4 名

のうち 3 名が感染していた HIV について分子疫学解析が終了した。今回解析した 3 つの HIV は、遺伝的には互いにかなり離れており、同一のグループとは言えなかったが、過去 5 年間に地域で検出された HIV の中には、それぞれと遺伝的に近い HIV が複数みとめられた。HIV 陽性者から得られた質問紙回答の数が少なく、グルーピングが難しいため、回答の集計・解析はこれまでのところ実施していない。

研究 5: 質問紙構成内容は基本属性、性的指向のカミングアウト、過去 6 ヶ月間および HIV 感染判明後の MSM 関連施設訪問経験、性行動、コンドーム使用行動、セィファーセックス規範、性感染症既往歴、K6、自尊感情、薬物使用などによって構成した。質問紙を含め、研究計画を大阪医療センター受託研究審査委員会に平成 26 年 10 月に提出し、承認され(承認番号: 14031)平成 27 年 3 月 1 日より調査を開始した。

D. 考察

研究 1: 2 万を超える MSM から、HIV 感染予防およびリスク行動の現状とそれに関連する多種多様な情報を得た。

MSM 間における出会いの場として、かつては商業的ハッテン場などが主流を占めたが、現在はインターネットに移行しつつある。GPS 機能を搭載したこれらの出会い系アプリなどにより、より手軽な出会いやセックス機会が MSM にもたらされていると言える。出会いやセックスの機会を手軽に獲得できるアプリの出現は、わが国の MSM に限ったことではなく世界的な潮流である。よって MSM を対象にした HIV 予防的介入をはじめとする健康教育・健康支援の実施にあたってはインターネットを活用することが今後さらに有効かつ、現実的な手法であると考えられる。

コンドーム常時使用率は概して低く、これまでの経年変化のモニタリングとしてもほぼ一律であり予防の実践状況は変わらず低率であることが示唆された。

HIV 抗体検査の生涯受検率は 54.7%、過去 1 年間では全体で 32.6%であり 10 代の受検率が最も低率であった。若年層や地方在住者への検査の環境整備が必要である。

研究 2: 東京・広島・新潟での研究参加者の反応はこれまでの実施地域と概ね同じであり、本法は地域を超えて受容され得るプログラムであると考えられた。しかし、東京に比して地方都市では参加者のリクルートが困難であった。母集団となる MSM 層の人口サイズがもともと小さい、大都市よりも潜在している可能性が大きい、情報を仲介する当事者団体がいない、など

からリクルート情報を行き渡らせにくく、希望者が実施場所に出向く上での物理的・心理的なハードルも高いと考えられる。一定のニーズはどの地域にもあると考えられるため、参加者に安全感を保証する工夫をし、広報のルートを多様に確保できれば、本法を全国どこでも実施する意義はあるだろう。

2 回の研修により、保健師が必要に応じて使える予防介入のスキルが増えただけでなく、予防介入への意欲も強まったとする反応が得られた。このことは、有効で実践可能な予防介入技法を学ぶことが、HIV 領域での保健師の機能を高めることに寄与することを示唆している。しかし現場の構造的な制約もあり、実践経験を蓄積するには時間を要すると考えられるため、普及には長期的なバックアップとモニターを継続する必要がある。

本法は一回性の関係の中であまり侵襲的にならないよう配慮し構造化した介入法であるが、今回コミュニティ活動家の感想から、対象者によっては、安全な場であればより個別性に沿って深く、あるいは自由に、振り返り言語化することへのニーズもあり得ることがわかった。他方で、個別面接の中で深い自己開示を促すことは自分たちの立場では困難、あるいは自己開示を受けた後のフォロー体制を敷くことが困難、などの指摘があった。グループイベントにした場合でもグループだからこそその本音のさせなさも想定されていたが、それをカバーする具体的な改善点や新たなアイデアも出された。本法をベースにして、コミュニティ活動家が主体となり地域特性に沿った応用を実現できる可能性はあると考えられる。

研究 3: 本年度は、授業案を作成するために、何度も授業案を練り直し現場の現役教員と討議を繰り返した。本研究で使用する授業案は、「多様な性を尊重することは、他者を尊重できており、なおかつ自己を尊重できていることである。これにより HIV 感染に繋がるような、無防備な性行動はとらない」という仮説に基づいて作成されているため、「なぜ多様性が尊重されなければならないのか」を生徒に伝えるという命題がある。一方、学校文化では多様性の尊重が自明ではない、という教師の指摘もあった。一様性や同質性が好まれたり、優劣や序列が存在したりする学校文化においては、多様性という概念が馴染みにくい価値観であることを示すものであろう。しかし教師たちは、多様性の重要性もまた気がついている。このように相矛盾するメッセージが送られている学校文化で学ぶ生徒たちが「多様性の尊重は、自分も他人も大切にされることだ、もしも尊重されないと、自分も他

人も否定されることになる」と“実感を持って”理解できることこそが、実際の授業の、さらには、その後の健康行動の要となるといえる。

研究 4: 研究 1 年目で特設検査場への説明段階では質問紙調査への協力の約束が得られていたが、その実現へ向けて調整中である。現在の特設検査場での年間の陽性者数（2014 年実績:35 件）を考慮すると、特設検査場での行動疫学調査を実施できなければ、グループ分けできる程度の陽性者の回答・HIV の分子疫学情報を得ることは難しい。よって、今後も粘り強く交渉し、特設検査場での行動疫学調査の実施に向け努力したい。

研究 5: 先行研究を参考に質問紙開発を終え、研究計画書等は研究者所属施設の IRB 審査で承認され、実施体制を整え調査を開始した。

E. 結論

研究 1: 全国 47 都道府県すべてから 2 万人を超える研究参加を獲得し、HIV 感染をはじめとする健康リスクや予防的保健行動の現状とその関連要因が明らかになったことから、実態に即した予防介入と施策を実施していくことが必要である。

研究 2: HIV 予防介入技法である認知行動面接、およびそれをもとに考案した簡易版（保健師向け）とグループ版（コミュニティ活動向け）モデルは、それぞれの領域での活用可能性を認められた。保健所での実践を今後継続してモニタリングと共にフォローする。また、コミュニティでの活用については、活動家の持つ経験知を活かした、地域ごとのオリジナリティのある展開をサポートして行きたい。

研究 3: 本年度は、7 回にわたる検討会を通して「性の多様性の尊重」に基づく、自己尊重と他者尊重に到達するための授業案を作成した。来年度は実際に授業を実施し、効果測定まで行うことを計画しており、若年層 MSM への効果的な情報提供の機会になると共に、HIV 感染予防行動の促進に寄与すると考えられる。

研究 4: 診療所における HIV 検査受検者を対象に、検査結果を関連づける質問紙調査を実施し、少数ながら解析対象となる HIV 陽性者の回答を得た。今後調査を継続し、また協力施設を増やすことで例数を増やし、HIV 陽性者の調査回答を統合的に解析する事で、HIV 感染に強く影響するリスク因子を明らか出来ると考える。

研究 5: HIV 陽性者のメンタルヘルスと性行動との関連と、その経年的変化の現状とその変化に寄与する関連要因を明確化することは、HIV 陽性者支援を含めわが国 HIV 対策の充実と促進に資するものと考えられる。次年度以降も調

査を継続実施していく計画である。

F. 知的財産権の出願・登録状況

なし

G. 研究発表

研究代表者

日高 庸晴

1. 論文

(英文)

- 1) Hidaka Y, Operario D, Tsuji H, Takenaka M, Kimura H, Kamakura M, Ichikawa S : Prevalence of sexual victimization and correlates of forced sex in Japanese men who have sex with men , Plos One , 9(5) , 2014.(e95675.-doi:10.1371/journal.pone.0095675s)
- 2) Matsutaka Y, Uchino T, Kihana N, Hidaka Y : Knowledge about sexual orientation among student counselors: a survey in Japan , International Journal of Psychology and Counseling , 6(6) , Pp74-83 , 2014 .

(和文)

- 1) 日高庸晴・古谷野淳子：性的マイノリティの自殺予防 ,精神科治療学 ,30(3) ,361-367 , 2015 .
- 2) 日高庸晴：ゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 感染リスク行動とそれに関連する心理・社会的要因 - 全国インターネット調査の結果から - , HIV 感染症と AIDS の治療 , 5(2) , 38-44 , 2014 .
- 3) 日高庸晴：LGBT 学生の存在を考える キャンパス内でのダイバーシティ推進のために , 大学時報 , 358 , 76-83 , 2014 .
- 4) 古谷野淳子・松高由佳・桑野真澄・早津正博・西川歩美・星野慎二・後藤大輔・町登志雄・日高庸晴：「その瞬間」に届く予防介入の試み MSM 対象の PCBC (個別認知行動面接) の検討 , 日本エイズ学会誌 , 16(2) , 92-100 , 2014 .

2. 学会発表

(国内)

- 1) 日高庸晴：ゲイ・バイセクシュアル男性におけるコンドーム使用状況 .シンポジウム性感染症予防のスタンダードとは？ あなたが健康な生活を過ごすために , 第 27 回日本性感染症学会学術大会 , 2014 年 , 兵庫 .
- 2) 日高庸晴：MSM における HIV 感染リスク行動とその関連要因 , 第 28 回日本エイズ学

会学術集会 , 2014 年 , 大阪 .

- 3) 日高庸晴：ゲイ男性における薬物使用と HIV 感染リスク行動 , 平成 26 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会 , 2014 年 , 神奈川 .

研究分担者

古谷野 淳子

1. 論文

(和文)

- 1) 日高庸晴・古谷野淳子：性的マイノリティの自殺予防 ,精神科治療学 ,30(3) ,361-367 , 2015 .
- 2) 古谷野淳子、松高由佳、桑野真澄、早津正博、西川歩美、星野慎二、後藤大輔、町登志雄、日高庸晴：「その瞬間」に届く予防介入の試み - MSM 対象の PCBC (個別認知行動面接) の検討 - , 日本エイズ学会誌 16(2) , 92 - 100 , 2014 .

佐々木 掌子

1. 論文

(和文)

- 1) 佐々木掌子 , 小児・青年期の性同一性障害への心理的アプローチ 思春期前の性同一性発達に焦点を当てて , 児童青年精神医学とその近接領域 , 13-16 , 印刷中
- 2) 佐々木掌子 , 性的マイノリティの子どもたちの現状と課題【連載最終回】 , 高校保健ニュース第 499 号付録 少年写真新聞社 , 8-9 , 2014 .

2. 学会発表

(国内)

- 1) 須藤武司(発表者) 佐々木掌子(指定討論) 山口豊一(司会) 性同一性障害児への間接支援をめぐる - 教育行政機関による環境調整のための取り組み - 第 33 回日本心理臨床学会 , 2014 年 8 月 26 日 , パシフィコ横浜
- 2) 佐々木掌子 , 心理発達の視点から見た小児の gender dysphoria 委員会シンポジウム「性同一性障害の概念と精神医学の関わりを再検討する DSM-5 の発表を受けて」 針間克己・松本洋輔・三橋順子(以上他シンポジスト) 齋藤利和(サブコーディネーター) 第 110 回日本精神神経学会学術総会 , 2014 年 6 月 28 日 , パシフィコ横浜

川畑 拓也

1. 論文

(和文)

1) 森 治代、川畑拓也、小島洋子、永井仁美、田邊雅章、原田一浩、松本治子、溝端孝史、田中佐代子:大阪府における HIV/AIDS の現状と対策について、病原微生物検出情報、Vol.35, 205-206, 2014

2. 学会発表

(国内)

- 1) 小島洋子、川畑拓也、森 治代、古林敬一、谷口 恭、井戸田一朗、駒野 淳: HIV 感染者における新規 Ae/G リコンビナント HBV の解析, 第 28 回近畿エイズ研究会学術集会, 2014 年 6 月 7 日, 大阪
- 2) 川畑拓也、森 治代、小島洋子、後藤大輔、町登志雄、鬼塚哲郎、塩野徳史、市川誠一、岳中美江、岩佐 厚、亀岡 博、菅野展史、杉本賢治、高田昌彦、田端運久、中村幸生、古林敬一: 診療所を窓口とした MSM 向け検査キャンペーン (2013 年), 第 4 回日本性感染症学会関西支部総会, 2014 年 6 月 28 日, 大阪
- 3) 川畑拓也、古林敬一: 大阪府内の性感染症関連医療機関における HIV 検査に関するアンケート調査, 第 4 回日本性感染症学会関西支部総会, 2014 年 6 月 28 日, 大阪
- 4) 川畑拓也、森 治代、小島洋子、後藤大輔、町登志雄、鬼塚哲郎、塩野徳史、市川誠一、岳中美江、岩佐 厚、亀岡 博、菅野展史、杉本賢治、高田昌彦、田端運久、中村幸生、古林敬一: 診療所を窓口とした MSM 向け検査キャンペーン (2013 年), 第 28 回日本エイズ学会, 2014 年 12 月 3 日, 大阪
- 5) 川畑拓也、古林敬一: 大阪府内の性感染症関連医療機関における HIV 検査に関するアンケート調査, 第 28 回日本エイズ学会, 2014 年 12 月 3 日, 大阪
- 6) 川畑拓也: 診療所における HIV 検査の算定要件緩和前後における比較検討. 第 28 回日本エイズ学会日本性感染症学会合同シンポジウム, 2014 年 12 月 5 日, 大阪

(海外)

- 1) Haruyo Mori, Yoko Kojima and Takuya Kawahata: Drug resistance mutations persist in HIV-1 proviral DNA despite 12 years of successful viral suppression, XX INTERNATIONAL AIDS CONFERENCE, 7.21.2014, Melbourne, Australia

白阪 琢磨

1. 論文

(英文)

- 1) Katano H, Hishima T, Mochizuki M, Kodama Y, Oyaizu N, Ota Y, Mine S, Igari T, Ajisawa A, Teruya K, Tanuma J, Kikuchi Y, Uehira T, Shirasaka T, Koibuchi T, Iwamoto A, Oka S, Hasegawa H, Okada S, Yasuoka A. : The prevalence of opportunistic infections and malignancies in autopsied patients with human immunodeficiency virus infection in Japan. BMC Infect Dis. 2014 , 14:229. Published online.
- 2) Imahashi M, Izumi T, Watanabe D, Imamura J, Matsuoka K, Ode H, Masaoka T, Sato K, Kaneko N, Ichikawa S, Koyanagi Y, Takaori-Kondo A, Utsumi M, Yokomaku Y, Shirasaka T, Sugiura W, Iwatani Y, Naoe T. : Lack of Association between Intact/Deletion Polymorphisms of the APOBEC3B Gene and HIV-1 Risk. PLoS One. 2014 , 9(3):e92861. Published online
- 3) Ota Y, Hishima T, Mochizuki M, Kodama Y, Moritani S, Oyaizu N, Mine S, Ajisawa A, Tanuma J, Uehira T, Hagiwara S, Yajima K, Koizumi Y, Shirasaka T, Kojima Y, Nagai H, Yokomaku Y, Shiozawa Y, Koibuchi T, Iwamoto A, Oka S, Hasegawa H, Okada S, Katano H : Classification of AIDS-related lymphoma cases between 1987 and 2012 in Japan based on the WHO classification of lymphomas, fourth edition. Cancer Med. 2014 , 3(1): 143-153
- 4) Tominari S, Nakakura T, Yasuo T, Yamanaka K, Takahashi Y, Shirasaka T, Nakayama T : Implementation of mental health service has an impact on retention in HIV care: a nested case-control study in a Japanese HIV care facility. PLOS ONE , 2013 , 8(7) (pp.1-6)
- 5) Watanabe D, Otani N, Suzuki S, Dohi H, Hirota K, Yonemoto H, Koizumi Y, Otera H, Yajima K, Nishida Y, Uehira T, Shima M, Shirasaka T, Okuno T: Evaluation of VZV-specific cell-mediated immunity in adults infected with HIV-1 by using a simple IFN- γ release assay. J Med Virol , 2013 , 85(8) (pp.1313-20)
- 6) Yoshino M, Yagura H, Kushida H, Yonemoto H, Bando H, Ogawa Y, Yajima K, Kasai D, Taniguchi T, Watanabe D, Nishida Y, Kuwahara T, Uehira T, Shirasaka T : Assessing recovery of renal

- function after tenofovir disoproxil fumarate discontinuation. *J Infect Chemother* , 2012 , 18(2) (pp.169-74)
- 7) Shimamoto Y, Fukuda T, Tominari S, Fukumoto K, Ueno K, Dong M, Tanaka K, Shirasaka T, Komori K : Decreased vancomycin clearance in patients with congestive heart failure. *Eur J Clin Pharmacol* , 2012 , 69(3) (pp.449-57)
- 8) Watanabe D, Yoshino M, Yagura H, Hirota K, Yonemoto H, Bando H, Yajima K, Koizumi Y, Otera H, Tominari S, Nishida Y, Kuwahara T, Uehira T, Shirasaka T : Increase in serum mitochondrial creatine kinase levels induced by tenofovir administration. *J Infect Chemother* , 2012 , 18(5) (pp.675-82)
- 9) Watanabe D, Koizumi Y, Yajima K, Uehira T, Shirasaka T. : Diagnosis and treatment of AIDS-related primary central nervous lymphoma. *J Blood Disord Transfus.* S1-001. doi: 10.4172/2155-9864.S1-001 , 2012
- 10) Fujisaki S, Yokomaku Y, Shiino T, Koibuchi T, Hattori J, Ibe S, Iwatani Y, Iwamoto A, Shirasaka T, Hamaguchi M, Sugiura W. : Outbreak of Infections by Hepatitis B Virus Genotype A and Transmission of Genetic Drug Resistance in Patients Coinfected with HIV-1 in Japan. *J Clin Microbiol.* 50(4):1507, 2012. Corrects: *J Clin Microbiol.* 2011 Mar.;49(3):1017-24

(和文)

- 1) 白阪琢磨 : DHHS ガイドラインについて - 主な改訂ポイント - 、 HIV 感染症と AIDS の治療、2014 年、vol.5 (No.2) (20-23 頁)
- 2) 吉野宗宏、矢倉裕輝、櫛田宏幸、米本仁史、廣田和之、坂東裕基、矢嶋敬史郎、小泉祐介、大寺博、富成伸次郎、渡邊大、桑原健、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨 : 当院における 1 日 1 回投与ダルナビル/リトナビルの使用成績、日本エイズ学会誌、2012 年、14 (141-146 頁)